

盛岡市指定無形文化財「舟っこ流し」と 中国「送王船」の関係に関する一考察

林 涛

はじめに

2020年12月、中国の福建省を中心に行われている祭祀行事「送王船」がユネスコ無形文化遺産リストに、あの名高い中国武術「太極拳」と同時に登録された。また、今回の登録に関して、特に注目すべき点は、中国とマレーシアの共同申請によるものであることだ。すなわち、「送王船」の登録自体は、中国の海洋文化が華僑の移住を通じて東南アジアの文化圏に入り込み、内外の融合を達成したことの現れであり、文化の伝播の好例の一つとも言える点である。しかし、学術の現状からみれば、中国東南地方の沿岸部によく見る民間信仰「媽祖」と同様、「送王船」に関する研究成果は中華圏に集中しており、海外の非中国語圏での文化受容に関する学術研究はあまり行われていないことが分かる。また、黄・任（2021）による先行研究では、長崎における送り盆行事「精霊流し」に焦点を当て、江戸時代の「送王船」が在日華人社会で「彩舟流し」として伝承し、後に九州地方の「精霊流し」に統合されたことを論じている。本稿はこの研究に基づいて、「彩舟流し」の後を追いつつ、遠く離れた東北地方の祭り「舟っこ流し」に注目した論文となる。

「舟っこ流し」が行われる岩手県盛岡市の東北地方と「彩舟流し」が行われる九州地方は、非常に距離が離れている。「彩舟流し」が行われる九州地方については、鎖国時代、唯一の交流の窓口としての長崎には、当時

*本稿は、日本現代中国学会東海支部第16回大会（2021年11月27日、愛知大学）にて発表した内容（題名：日本における「送王船」風習の受容と変化）をもとに執筆したものである。

多くの福建商人が転入し、「送王船」を含む彼らの民間信仰も同時転入したことは理解しやすい。しかし、交通手段が発達していない江戸時代、「舟っこ流し」と「彩舟流し」の繋がりとなる伝播ルートの解明がそう簡単ではない。さらに、日本において、「舟っこ流し」に関する研究は乏しく、ご当地の風習の紹介として、郷土史などの書物の中に散在しているものがほとんどであるが、情報の量が非常に少ない。2020年あたりから始まるCOVID-19によって、訪日し現地でのフィールドワークも困難になったことも、本研究において、一つの難点であった。一方、中国伝来の仏教黄檗宗に関する研究は、中国においても、日本においてもある程度の蓄積がある。そんななか、本稿は新たな史料の発見・発掘として、黄檗宗の民俗分野での影響を明らかにしたものである。今日、中国政府の海洋重視の戦略のもとで、海上のシルクロードが盛んに研究されてきたが、「南下ルート」（福建省の泉州から出発し、東南アジア・インド洋を經由し、ヨーロッパに到着するルート）に集中しており、中国国内でも一般によく知られている。しかし、福建から出発し、明州（現在の浙江省寧波市）を經由し、朝鮮半島と日本を結ぶ「北上ルート」（北東アジアルート）はまだ十分に注目されておらず、研究成果も限られている。本稿は、この北東アジアルートに着目し、日本の民間祭祀、特に日本の東北地方における中国文化の伝播に焦点を当て、北東アジアルートの研究価値も明らかにすることを目的とする。

1. 「送王船」と「舟っこ流し」の概要

1.1 ユネスコ無形文化遺産「送王船」の概要

「送王船」は、中国大陸部の福建、台湾、東南アジアに広く伝わる除災招福の儀式の一種である。その起源は、遡ること15～17世紀、華僑の海上貿易が東南アジアに進出したことで、東南アジアの華僑の間で「送王船」の儀式が盛んに行われてきた。現在は、主に海岸地域の漁村において、地元の寺院が開催主体となり、3～4年に一度の頻度で行われ、祭り当日に、「王爺」という神様を乗せた木製（または、紙製）の船を海や川など水辺まで送り、船を燃やす形式をとっている。具体的には、祭りの数か月前か

盛岡市指定無形文化財「舟っこ流し」と中国「送王船」の関係に関する一考察

ら船の製作や「迎王」（王爺を迎える）を呼ぶ儀式など一連の準備作業が行われ、当日には、船を燃やす前に、「王爺」を乗せた船を担いで、コミュニティーの疫病退散を願いながら行列の行進が実施される大規模な祭りである。そして、ユネスコは2020年12月17日、中国とマレーシアが共同で申請した「送王船——人間と海洋の持続可能な結び付きの儀式と関連実践」を、無形文化遺産に登録した。



写真1 漳州保泉宮の「送王船」儀式（筆者2021年撮影）

1.2 盛岡市指定無形文化財「舟っこ流し」の概要

「舟っこ流し」は、岩手県盛岡市に流れる北上川の明治橋の辺りで、毎年お盆の時期に行われる送り盆行事である。提灯や盆の供物で飾った舟に火を放ち、川に流し、祖先の霊を送り、無病息災を祈る儀式だが、儀式の形式は中国東南地方沿岸部の「送王船」によく似ている。「舟っこ流し」は、地域の寺院主催のもとで行われ、各地域に豪華絢爛に飾り付けられた舟を贈り、盛岡市全体で合計10隻以上の舟を担いだ行進から成り立つ行事である。行事の際には、長さ5～6メートルほどの木造の舟を、十数人の若者が禪姿で担ぎ、村を練り歩く。舟の舳先に龍頭、舟尾は龍尾のつくりものを取り付け、中央部には、村人の亡くなった親族の名前と「南無阿弥陀仏」が書かれた「万霊供養塔」が設けられている。そして夕暮れ時になる

と、各町内は舟を北上川の明治橋の辺りまで運び、そこで舟に火をつけて、川を中心まで押し出す。そして、水と火からの清めを受けた舟が、人々が見守る中、川の中へ流れていく。すなわち、亡くなった親族の魂を西方極楽浄土に送り出す人々の祈りが込められた儀式なのである。この美しい風景に魅せられ、江戸末期に、新山舟橋（後の明治橋）は〈盛岡八景・舟橋の夕照〉と呼ばれるようになった。また「旅人は急ぎ渡れど舟橋に 暫しはよどむ夕日影かな」との歌も残されている⁽¹⁾。

「舟っこ流し」は、享保年間（1716～1736年）に岩手県の名刹・大慈寺の河原で行われた川施餓鬼儀式を起源とし、約300年の歴史を持っている。明治以降、戦乱や災害の際に霊を慰めるために行われるようになり、現在では「万霊回向」（死者の成仏を願って仏事供養をすること）という本来の意義を維持しつつ、無病息災や五穀豊穡を祈るなど、より一般的な目的にまで拡大している。「舟っこ流し」は、現在盛岡舟っこ流し協賛会が主な主催団体であり、その実施主体は、中心メンバーの市内28の町内会会長と、町内青年会で構成されている⁽²⁾。当初の単純な民俗的行事とは異なり、現在では行事の後に花火大会が行われることも多く、長崎地域の「精霊流し」のように、当初の小規模な民俗的行事から、宗教法人や参拝者、



写真2 「舟っこ流し」のパレード風景（和田義男2013年撮影）

(1) 岩手県立図書館、「川をゆく」HP：https://www.library.pref.iwate.jp/ex/iwate06_kawa/kawa/yomu01.html（2023-8-17閲覧）。

(2) 「舟っこ流し」公式サイト：www.moriokafunekkonagashi.com（2023-8-11閲覧）。

地域内外の一般市民、そして行政まで参加する、地域行事へと拡大し、地域経済活性化のための観光資源として徐々に発展してきた。そして、娯楽性、審美性、神秘性を兼ね備えたことで、伝承価値が高い総合的な民間儀式となっている。



写真3 舟を燃やす儀式（和田義男2013年撮影）

2. 「舟っこ流し」の中国出自に関する考察

結論から言うと、筆者の検証によると、「舟っこ流し」の儀式の始まりは、中国福建省から日本に伝わった仏教の黄檗宗と密接な関係があると考えられる。なぜなら、黄檗宗文化が直接「舟っこ流し」儀式の主な参加者、行事の目的、そして主な行事内容などの面に寄与し、日本の東北地方に定着したと結論付けられているためである。

2.1 黄檗宗について

黄檗宗（おうぼくしゅ）は、臨済宗、曹洞宗と並ぶ日本禅宗三派の一つであり、中国明代の僧侶隠元隆琦（1592-1673）を開祖とし、京都府宇治市にある黄檗山万福寺を大本山とする宗派である。明末清初の動乱期に、隠元禅師は、中国福建にある臨済宗寺院黄檗山万福寺の住職を17年間務め、当時福建・浙江の仏教の繁栄に多大な貢献をした。その後、1654年に、長崎在住の華僑の懇願に応じ、隠元禅師は来日し、長崎の唐寺興福寺の住職に就任した。また翌年には、長崎の崇福寺にも住職に就任し、その後、

大坂、京都、江戸などを旅し、各地で仏教の教えを広めた。さらに4代将軍徳川家綱に謁して信頼を得、1661年、幕府の許可を得て山城国宇治に新しい寺を開き、先住地の名を取って黄檗山万福寺と名付けた。京都萬福寺の建立は、中国仏教の臨済宗の黄檗派の日本への伝来と、日本における禪宗の新しい宗派である黄檗宗の成立を意味した。

創始から1745年までの100年足らずの間に、黄檗宗は日本各地で急速に発展し、寺院の数は1043に増え⁽³⁾、禪の思想、戒律、作法、寺院の組織制度など多くの面で日本の仏教界に大きな影響を与えた。隠元に代表される中国人僧侶たちは、来日後、仏教思想のみならず、文学、言語、建築、彫刻、印刷、音楽、医学、茶道、料理、絵画、書道、印章など、明清時代の文化を日本に統合し、「黄檗文化」と呼ばれる総合的な文化形態を形成した。

2.2 「舟っこ流し」の起源

「舟っこ流し」の起源については、東北地方では、歴史上の重要人物である麻久子姫が関与する統一説が残されており、墓碑など多くの史料に裏付けられ、一定の信憑性が認められている。盛岡藩第4代藩主南部行信の七女・麻久子姫（幕子）は、14歳で駿河（現在の静岡県）守高久に嫁ぐが、二年で離縁する。その後、和泉陶器藩（現在の大阪府堺市）の四代目藩主小出重興に再び嫁ぐが死別した。重興は麻久子姫との間に嗣子がなかったため、弟の「小出重昌」を養子とすることで存続を願い出たが、その許可が出る前に重興が病死し陶器藩は無嗣のために改易（所領が朝廷に取り上げられる）となり、和泉陶器藩の消滅を迎える⁽⁴⁾。苦難の連続を経験した麻久子姫は盛岡に戻り、大慈寺（黄檗宗）で髪をおろして光源院と号した。この光源院の命によって、大慈寺四世万叡和尚の代に、北上川の舟橋の下流で「川施餓鬼」（蒙山施餓鬼会、もうざんせがきえ）を行ったのが、「舟っこ流し」の始まりと言われる⁽⁵⁾。さらに、文化年間（1804年～）頃、津志田の遊郭の大時と小時という売れっ子の遊女が盛岡城下に遊びに来ていたある日の帰り、門限に遅れまいと北上川の舟橋を渡ろうとした時、折から

(3) 林観潮、「隠元大師と黄檗文化刎議」、『仏学研究』、2017年第1期、169-184頁（中国語）。

(4) 日本の歴史ガイドHP、「陶器藩」、<https://www.jp-history.info/all-han/6851.html> (2023-8-17閲覧)。

(5) 盛岡市教育委員会、『盛岡市無形文化財シリーズ29 盛岡の裸祭 盛岡の舟っこ流し』、内外タイプライター商会、1998年、55頁。

盛岡市指定無形文化財「舟っこ流し」と中国「送王船」の関係に関する一考察

の台風で水の勢いにおされ、力尽き溺れて亡くなってしまった。人々はそれを哀れみ、「舟っこ流し」が盛んになったという⁽⁶⁾説がある。

2.3 黄檗宗大慈寺について

最初に「川施餓鬼」を行った大慈寺（だいじじ）に関しても、調査してみた。前述したように、大慈寺には高さ約2メートルの御影石でできた麻久子姫の墓石がある。この大慈寺は、南部重信公が帰依し、一字を建立し開山した歴史もある。麻久子姫の関係で南部藩の庇護もあり、大慈寺はその後、寺領63石が安堵され末寺10カ寺を擁する大寺院に発展した⁽⁷⁾。また第19代内閣総理大臣・原敬も死後、大慈寺に埋葬されたほどの規模となった。詳しく述べると、もともと大慈寺の前身は、寛文年間（1661-1673）に創建された草庵だった。『盛岡の寺院』によると、開山の徳真道空（とくしんどうくう）和尚は、俗姓長野氏、元和六年（1620）に生まれ、伯父境某に嗣子がなかったので養子となる。長ずるに従って深く仏門に帰依し、正保二年（1645）養父母の反対を押し切って、洛北大応寺快円律師のもとに走り、得度出家した。それから快円律師に就き、禅律を兼修し、また広く経論を学ぶ。後、黄檗にのぼり、木庵禅師に師侍し、法を求め、長く修業をした。そして、草庵を建て、生涯出世を願うことなく、ただ法を弘めるだけの生活をした。南部太守重信公がこれを聞いて深く帰依し、糧料を賜ると言ったがそれを堅く辞退した。ついに土地を賜って一字を建立し、福聚山大慈寺と称した⁽⁸⁾。修行の師となる木庵性瑫は黄檗宗の大本山である京都の萬福寺の二代目の住職を16年間（1664-1680年）務めた人物である。木庵性瑫（1611-1684）は、福建省泉州市晋江の出身で、世間に「黄檗三傑」の一人として知られ、隠元禅師の良き弟子である。大慈寺の山門の建築様式は、長崎の黄檗宗崇福寺の竜宮型山門を模しており、唐寺の特徴を残している。現在大慈寺では、京都の萬福寺と同じ中国の「精進料理」や「普茶料理」を味わうことができる⁽⁹⁾。

(6) 「舟っこ流し」の実施寺院「長松寺」HP：<https://tyoshoji.com>（2023-8-11閲覧）。

(7) 岩手県の街並みと歴史建築HP、「大慈寺の概要」：<https://www.iwatabi.net/morioka/morioka/daijiji.html>（2023-8-17閲覧）。

(8) 盛岡市仏教会編、『盛岡の寺院』、盛岡市仏教会、1995年、113頁。

(9) 大慈寺HP：<https://salesdaijiji.wixsite.com>（2023-8-18閲覧）。



写真4 長崎崇福寺の山門（左）と大慈寺の山門の比較写真
（出所：長崎観光協会⁽¹⁰⁾、岩手県観光協会⁽¹¹⁾）

2.4 長崎唐寺と「彩舟流し」の関係

「彩舟流し」は「王爺」神様登場する前、すなわち初期段階の「送王船」であり、福建華僑の移入でそのまま江戸時代に長崎の華僑コミュニティの中に定着した祭祀行事である。実際に、「彩舟流し」の行事内容と長崎唐寺執行が分かる証拠実物が日本国立歴史民俗博物館にあった。館内に所蔵されている、江戸時代製作の長崎版画「綵舟流唐船図」に1885年実施の行事が詳しく記載されている。

(10) 長崎市公式観光サイト、崇福寺、<https://www.at-nagasaki.jp/spot/96> (2023-8-18閲覧)。

(11) 岩手県観光協会、大慈寺、<https://iwatetabi.jp/spot/detail/03201/691.html> (2023-8-18閲覧)。



写真5 日本国立歴史民俗博物館所蔵、長崎版画「綵舟流唐船図」

記載内容は以下の通り：

「天保十五辰年二月於長崎館内船模造 日本産物交易品并ニ乗組各衣財
 数ヲ揃粮酒肉野菜薪水悉ク積入同月朔日ヨリ十一日迄三ヶ寺衆僧日々誦経
 執行 同十日浮船十一日湊出帆在館唐人沐浴衣更供備焼金賤値庫ヲフリ南
 福漳楽ヲ拍子踊ヲ催船主ヲ初各来拜霊ヲ祭り於洋中船ヲ焼消ス 文政元寅
 年ヨリ今年迄舶来死去唐人 船主楊秋棠 鈕梧亭（ほか2名、財副5名）
 惣乗組霊越百八人 霊祭執行聖福寺 南京興福寺 福州崇福寺 漳州福濟
 寺并廿四箇庵」

現代文に訳してみた。

「天保15年（1884）2月に長崎館内において船を模造する。日本産の貿易品及び乗組員の衣服財を揃え、食料・酒類・肉類・野菜・薪・水と一緒に積み入れる。2月1日より11日まで、三つの寺の僧侶日々お経を読み、執行する。2月10日に船を海に浮かべる。翌11日出港する。在館⁽¹²⁾唐人

(12) 長崎唐人屋敷は1870年焼失したため、こちらの長崎館内はどちらの施設にあたるか不明である。

は沐浴・更衣してから、金色の位牌を燃やす。値庫（てっこ、長い棒）を振り、南福漳（南京・福州・漳州の略）の音楽を奏で、拍子を踊る。船主をはじめ、唐人が拜霊に集まる。海上で船を燃やす。文政元年（1818）より今年まで舶来し死去した唐人：船主楊秋棠 鈕梧亭（ほか2名、財副5名）を含む乗組員計108名。祭り執行：聖福寺 南京興福寺 福州崇福寺 漳州福濟寺及び庵24か所」

以上の内容から見れば、「彩舟流し」は17世紀創建の四つの唐寺の僧侶が執行する仏教の行事で、目的は異郷で亡くなった華僑の霊を慰めることが分かる。これは長崎華僑の信仰と一致している。

2.5 「彩舟流し」と「舟っこ流し」の伝承関係

今日においても、長崎の唐寺及び京都の萬福寺では、毎年の中元の時期に、「普度」と呼ばれる大規模な施餓鬼儀式を行っている⁽¹³⁾。この「普度」は中国の伝統行事であり、その内容の一環として、船を燃やす「焼法船」という儀式が組まれる。また、清朝の詩人得碩亭の漢詩「草珠一串」の中で、「焼法船」と「灯籠流し」の中元施餓鬼を記録している。「御河橋畔看河灯，法鼓金鑊施食能。焼過法船無剩鬼，月明人静水澄澄。⁽¹⁴⁾」華僑の主な移住地としてのマレーシアの華人コミュニティにおいても、「焼発船」（「発」と「法」の中国語の発音がほぼ同じ）と施餓鬼の儀式が伝承されている⁽¹⁵⁾。亡くなった親族の位牌、紙紮（生活に必要な家や車などを紙細工にして葬儀の時に燃やす時に用いられるもので、あの世の生活も潤ったものになるといふ言い伝えがある）を、施餓鬼のための供え物と一緒に「発船」と呼ばれる大きい紙製の船のなかに入れる。その後、僧侶がお経をしてから、船を燃やし、故人の魂を極楽浄土まで送る。また、多くの長崎華僑の故郷である福建省漳州においては、宋の時代に「普度」の内容の一環とし

(13) 松尾 恒一、「在日華僑の普度勝会、長崎・神戸・京都——日本の祖霊信仰を問い直す視点」、『西日本宗教研究誌』、25-33頁、2017年3月。

(14) 蔡志祥、「從鬼戲到歌台——中元普度的娛樂、表演与儀式」、『節日研究』、3-22頁、2019年第2期。

(15) 王鈞妹、『文化继承——從「儀式傳播」到「儀式化傳播」——以馬來西亞華人社群「閩南中元普度儀式為例」』、『世界民族』、94-103頁、2016年第3期。

盛岡市指定無形文化財「舟っこ流し」と中国「送王船」の関係に関する一考察

て、「焼法船」を導入し、現在まで継承されている⁽¹⁶⁾。

日本黄檗宗の開祖とされている隠元禅師は来日した後、長崎の興福寺、崇福寺、さらに京都萬福寺の住職に歴任した経緯がある。興福寺、崇福寺は「彩舟流し」を執行する主要の寺院の二つである。そして、大慈寺の前身である草庵の創立者徳真道空は、隠元禅師の愛弟子木庵性瑠（萬福寺の二代目住職）のもとで長らく修業していた。実際、萬福寺が建立した後、似たような儀式も主催している。なかでも「黄檗山川施餓鬼」、「水灯会」は京都のお盆の時期の代表的な景観であり、俳句のなかの秋の季語として、日本俳句季語辞書に収録されている。また、およそ20年前まで、宇治川の川瀬に舟を浮かべ、読経しつつ蓮華形の灯籠を流した儀式が見られていた⁽¹⁷⁾。このような行事が盛んに行われる萬福寺で長らく修行を重ねた徳真道空も船を用いた施餓鬼儀式を目の当たりにし、実践者として参加した可能性が非常に高いと推測できる。また、盛岡市で草庵を創立した後も、この中国式の施餓鬼儀式を含めて、黄檗宗の教えを九州から離れている東北の奥地まで広めたのだろう。当時の中国文化は日本の上流社会の慕う対象として、高い地位を確保していた。「送王船」の長崎版としての「彩舟流し」も南部藩の巨大な力を借り、地域住民が厚く信仰する民間信仰に定着し、「舟っこ流し」という地域の伝統行事を形成したと考えられる。

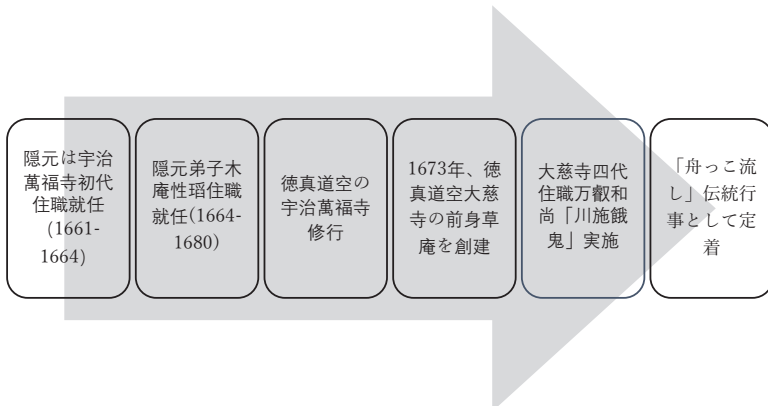


図1 「舟っこ流し」の定着までの歴史的経緯（筆者作成）

(16) 陳栄翰、「漳州普度習俗の演変」、『漳州職業大学学报』、56-59頁、2004年第4期。

(17) 季語歳時記HP : kigosai.sub.jp (2023-8-20閲覧)。

3. フィールドワークの記録

筆者は2021年6月から2023年9月まで、福建省の廈門市と漳州市で、「送王船」のイベントを行う五か所の寺院にてフィールドワークを行った。フィールドワークの主な内容は、各準備段階、祭り当日の参与観察、また団体の主要メンバーへの聞き取り調査となっている。さらに、「送王船」のユネスコ無形文化遺産登録の実施主体である「閩南文化研究会」が主催する学会活動にも参加し、「送王船」風習の日本受容に関して、複数回学術発表を行った。また、筆者在籍している大学では、「送王船」のユネスコ無形文化遺産登録がきっかけとなり、「送王船」研究チームを結成した。本稿は、筆者が所属する研究チームが発表した「送王船」論文シリーズの第二弾に位置づけられる。

本稿が完成する直前の2023年8月に、盛岡市では「舟っこ流し」祭りが実施されている。本来筆者もコロナ収束後に訪日し、準備段階からの調査も必要だと考えて、観光ビザより長期間の訪日ビザを取得し現場でのフィールドワークを実施する予定だったが、諸事情によりビザの取得ができなかったため2023年度の現地調査が行えなかった。そこで、運営主体の「盛岡舟っこ流し協賛会」にメールでの書面調査を依頼した。また、動画サイトYoutubeにも「舟っこ流し」祭りの当日の様子、その後の投げ松明、花火大会の動画が掲載されていたので、これらの動画と主催者からの文字回答を通して、検証を行った。

3.1 福建省廈門市「水美宮」2022年度「送王船」の記録

「水美宮」は廈門市海滄区にある「送王船」実施寺院の一つであり、「送王船」無形文化財伝承センターの一つとして登録されている。三年に一度「送王船」のイベントを行う。「○○宮」は道教の寺院にあたるが、福建地方の民間信仰における「仏道習合」のため、仏教の儀式を道教の寺院で実施することも珍しくない。「水美宮」が位置する鐘山村はかつて海辺の漁村であったが、現在都市化によって、海には接しておらず、村の一角にある湖の水は海との唯一の繋がりとなっている。鐘山村では、複数の名前の村民が住んでおり、「蔡」、「鐘」、「林」が有力の宗族である。清朝から、

盛岡市指定無形文化財「舟っこ流し」と中国「送王船」の関係に関する一考察

海外特にマレーシアのペナン島への移住者が多く、現在ペナン島には同じ「水美宮」と命名される分祀の寺院が存在する。以下は2022年度「送王船」実施内容の記録である。

9月11日(旧暦8月16日)立竿昇旗。「水美宮」の前に高さ8メートルほどの、のぼりを2本立て、「送王船」の準備作業の開始を宣告して、爆竹を鳴らす。続いて「鐘山水美宮理事会」の理事たちが祈りの儀式をしてから、船の製作用の木材を搬入する。

9月18日 安棧儀式。船製作の第一歩であり、船の製作開始を宣告する儀式。大勢の信者が供物を持って参拝に来る。爆竹を鳴らし、夜には、小規模の花火大会を行う。

11月12日 安竜眼儀式。船の製作の最終段階で、船頭に目を描く。できた船は長さ12メートル、高さ7メートルにも及ぶ。

11月19日 立桅・請帆・進水。船に帆柱を立て、帆を取り付ける。近くの海から海水を汲み、船に入れる。儀式に使う船の密閉性を検査し、航海機能がしっかり備えていることを確認する儀式である。

注:「水美宮」では「迎王」(神様の降臨を迎える)儀式を行わないが、一般的に各「送王船」実施寺院では、盛大な「迎王」儀式をメインイベントの数日前に行う。海辺から「王爺」を迎え、各寺院に設定されている専用の部屋に安置される。道教の道士による法事、また小規模のパレードが伴うことが多い。

12月11日 メインイベント当日

08:30 仙舟遊境。神様が船に乗って村中「代天巡狩」を行う(天に代わってパトロールし、疫病を退治する)。「王船」に神様「王爺」と米などの食料品を載せる。50名ほどの成人男性が船を担いで村中パレードする。行列の先頭は閩南地方の獅子舞、民間音楽団、百足の陣などで構成されパフォーマンスをしながら行進する。船の周りには、花で豪華に飾られている帽子を被った船員役の「採蓮手」の男性たちが船の櫂を持って護衛する。そして信者たちは、お香を持って船の後ろについて歩く。また沿道の住民たちは、玄関前でテーブルを設置し、鶏、豚肉などの供物を用意して、船が通る際には、各自爆竹を鳴らす。そして、大きい交差点の前では、船のスピードを一気に上げて海原の大波の中で航海している様子を表現する。

担ぎ手の男性たちは小走りしながら、閩南語で「順風満帆」と叫ぶ。船の後に随行する信者も大声で応援する。交差点に入り、いったん停船し、担ぎ手の男性を入れ替え、船の舵取り役の男性が船の上からみかんを投げ配る。そのみかんを拾った信者たちは神様からの頂き物と歓喜する。その後、四人ほどの道士が船の前で法事をする。パレードする距離は4キロメートルで、行進はお昼まで続く。

16:00 出発在場。午後、船の出発前の準備作業。普度儀式（閩南地方の施餓鬼儀式）を行う。今年度の大口寄付をした信者家族全員が「王爺」の前で祈る。道士がもう一度法事をする。

19:10 請王上船。道士が法事をしているなか、「王爺」を船に載せ、船を担いで指定の場所まで行進する。途中の様子は午前中とほぼ同じである。

20:00 王船化吉。船を燃やす儀式で、祭りのクライマックスとも言える。船が村の外にある滄江劇場前の広場(湖の近く)に到着する。紙で作った兵士、供物のすべてを船の中に積む。そして、運営会の理事たちが急いで帰宅し、着替える。道士がもう一度最後の法事をする。21時半ごろ、理事たちが戻り、大勢の信者、地元のテレビ局、各メディアが見守るなか、村の長老が船に火をつける。炎が燃え上がり、周りの信者からの歓声がある。一部の信者は跪いて拝む。同時に、花火大会が始まる。帆柱が倒れるまで約45分火が燃え続ける。儀式が終わり、お祝いのため、村の役場前の広場で閩南バージョンの京劇が始まる。

3.2 岩手県盛岡市2023年度「舟っこ流し」の記録

準備段階の内容は主に「舟っこ流し協賛会」のFacebook、またメインイベント当日の様子は主にYoutubeに掲載されている動画、さらに運営主体の協賛会から提供された一部の情報を参考にした。

例年5月 各町内会単位で会合を持つ。

7月1日 盛岡舟っこ流し協賛会総会、活動開始。

7月2日 舟っこ流しに使用する麦からを、盛岡市内太田地区から調達する。

7月4日 舟製作開始、今年度の流舟の順番が決まる。①仙北3丁目町内会
②仙北2丁目自治会③仙北1丁目第一町内会（青物町）④南大通2丁目町

盛岡市指定無形文化財「舟っこ流し」と中国「送王船」の関係に関する一考察

内会⑤南仙北1丁目町内会⑥鉾屋町町内会⑦南2・3丁目町内会⑧駒形自治会⑨松尾町町内会⑩立正佼成会、以上10団体の参加が決まる。花火大会で打ち上げられる「メモリアル花火」を個人対象に募集する。

7月25日 回覧板また掲載ポスターによる「舟っこ流しの担い手」と学生向けの舟製作体験者、投げ松明参加の子供の募集開始。

8月5日 点検実施。投げ松明づくり。

8月7日 舟製作完了。提灯、造花、五色弊などで飾る。船首を龍頭の形にする舟が多い。全長約4メートル、幅約1メートル、高さ約2メートル。地元テレビ取材を受ける。盛岡市の観光ボランティアガイド団体「盛岡善意ガイドの会⁽¹⁸⁾」のHPによると、ドイツ、中国、アイスランド、アメリカからの留学生の方たちも舟製作に訪れ、善意ガイドの会によるガイドが行われた。

8月13日 会場の枝払い作業。17:30より長松寺などの寺院で戒名の受付。舟っこで物故者を供養する。

8月14日 「舟っこ」が完成して各展示場所で公開される。子供会が作成した短冊や各家庭から預かった戒名が舟に乗る。舟っこの中央に「万霊塔」が設定され、亡くなった故人の名前が記されている。

8月15日 会場設営、仮設トイレ設置。

8月16日 メインイベント当日

約15時 各寺院で、僧侶による法要が実施され、舟の担ぎ手の男性20名は順番で焼香する。法要完了後、明治橋を向かって、舟を担いで行進する。列の先頭に子供会の子供たちが千羽鶴、五色弊を持って歩く。婦人会のメンバーは荷物を載せたりヤカーを引いて列の最後に歩く。舟が大きいいため、車道で行進することが多い。一方、安全確保のため、子供が列の前方の歩道で歩く。途中で何度か停船して休憩を取る。15時45分に会場に到着する。子供たちが持ってきた笹竹をおろされた舟に挿し、別れを告げる。

16時 舟っこ流し。場所：明治橋上流右岸。10隻の舟が明治橋下の河川敷に集合する。トラックで運んでくる自治体が多い。仙北2丁目自治会のみ上半身裸、赤ふんどし姿で登場する。今年はモンゴル人の赤ふんどし

(18) 「盛岡善意ガイドの会」HP：<http://moriokaguide.amigasa.jp/index.html>

参加もあった。各メディアが見守る中、開会式が行われる。盛岡市長が挨拶する。解説のアナウンスは「盛岡善意ガイドの会」によって日英二か国語で実施される。また、「盛岡善意ガイドの会」HPの掲載写真から、外国人の来場者の確認ができる。会場の中央に法要の台が設定されている。僧侶4名の参加があり、うち1名による読経がある。その後、舟の担ぎ手が順番で焼香する。17時になると、順番で舟を担いで川へ向かう。先頭に自治体の名称が書いてあるのぼり、長さ3メートルほどの点火棒を持つ人が歩く。邪気を払うため、舟に花火と爆竹が仕掛けられている。舟が慎重に川の中に運ばれる、そして、四つの方向から舟を結ぶ紐を引っ張って舟の横転を防ぐ。点火すると、龍頭から花火が噴き出る。舟全体が燃え上がる。一部の自治体の舟を流す際、子供による舟製作の体験感想、故人への思いなどの作文が読み上げられる。二つの自治体の担ぎ手に、女性各2名ほどの参加が確認できる。川に入る途中、一隻の舟が横転するハプニングもあった。

例年の参加者は600人程度で作り手をいれると1000人程度(13艘として)になる。今年度の来場者数は主催者発表で18,000人である。

18:30-19:00 投げ松明。今年は燈籠流し実施しない。「蜂の巣」と呼ばれる麦わらであんだ籠を載せた、高さ8mもある竿を川原に立てる。子供達が、投げ入れの合図とともに点火した松明を片手でクルクルと回しながら、頭上の蜂の巣目がけて投げ合う。今年は7回目で命中し、周りから歓声が上がった。

19:00-19:30 花火大会

4. 「舟っこ流し」から見る文化伝播

4.1 儀式の基本特徴が維持されている

19世紀末ドイツのL.フロベニウスによって「文化圏」という概念が提出された。その後、形成されたドイツ・オーストリア伝播主義学派を代表するグレープナーは、文化圏の研究は「形の基準」と「量の基準」に基づくべきだと指摘した⁽¹⁹⁾。「文化圏」、そして台湾植民地支配時代において、

(19) 孟慧英、「文化圏学説与文化中心論」、『西北民族研究』、179-186頁、2005年第1期。

台湾漢人を研究する岡田謙が提出した「祭祀圏」、さらに、1972年に王世慶より出された「信仰圏」⁽²⁰⁾など一連の理論は本稿には当てはまらないかもしれないが、この形と量の基準に関する記述は何らかの参考になるだろう。この基準は、主観的な判断の偏りを抑制する基本的な視点に立ち、物事の発展の必然的な結果や、物質的・地理的環境や気候条件によって決定されない現象ではなく、互いに適合する物事の特徴を観察することを要求する。この観点からも、中国の「送王船」、日本の「彩舟流し」、「舟っこ流し」の儀式的形について比較研究を行うことが必要である。

しかし、長崎唐人屋敷の1870年焼失や、明治政府の対中国人管理政策の変化などの背景があり、長崎在住の中国人が日本各地に分散移住していた。最終的に、明治政府は「彩舟流し」などの行事の実施禁止令を出した。その結果、「彩舟流し」を研究するには、当時の画家の絵画作品、あるいはわずかな文字資料から手がかりを探るしかない。しかし、現代に受け継がれている中国の「送王船」と日本の「舟っこ流し」との比較も検証上必要不可欠な作業だと認識している。以下、舟作り・御霊（神）を迎える・パレード・舟を燃やす・宗教法事という主な五項目から「送王船」と「舟っこ流し」を比較して共通点を探った。

表1：中国東南地方沿岸部の「送王船」と日本盛岡市の「舟っこ流し」儀式的比較

	「送王船」	「舟っこ流し」	共通点
舟作り	「王爺」・紙で作った兵士を載せ、小旗で飾られた木製の舟。特に目の彩色などの龍頭部分や、舟全体を通す龍骨の製作にこだわっている。作業開始前後、のぼりを立てる・帆を立てる・水を注ぐ・帆に神降臨などの一連の儀式がある ⁽²¹⁾ 。	造花や五色弊で飾られた木製の舟。特に龍頭作りにこだわっている。作業開始に至るまで、寺院などでの祈りが見られる。	舟作りと法事行為の段階、舟に神秘性を与える行為が見られる。(中国人学者王栄国が曰く「アニマティズム的な舟崇拜が特徴的」 ⁽²²⁾)

(20) 孫振玉、「台湾民族学的祭祀圏与信仰圏研究」、『中南民族大学学报（人文社会科学）』、32-36頁、2002年9月。

(21) 陳耕・蔡亜約、『海系送王船』、鷺江出版社、17頁、2019年。

(22) 王栄国、『海洋神靈——中国海洋信仰与社会經濟』、江西高校出版社、6頁、2003年。

御霊（神） を迎える	海辺で「迎王」儀式を行う。 寺院進駐と共に、「開眼」 儀式がある。	各家庭は供え物を用意し、灯籠を掛け、迎え火を焚く。 寺院に止まる舟の前に「入魂式」を実施する。	準備段階の神聖化作業・住民の敬虔な信仰心を確認できる。
パレード	舟を担いでコミュニティーの中でパレードする。列の中に、箒隊・百足陣・太鼓隊・宋江陣などのチームがある ⁽²³⁾ 。	舟を担いでコミュニティーの中でパレードする。列の中に、五色幣・千羽鶴を持つ子供会の姿を確認できる。	神（霊）の力で邪気を払い、コミュニティーを浄化する。
舟を燃やす	舟を海辺まで運び、豪華な紙紮を載せてから舟を燃やす。	舟を川の中央まで持っていて、松明で舟を燃やす。	故人の魂を西の極楽浄土に送る・「王爺」を天に送る。村全体が浄化される。
宗教法事	舟作り・舟出発前・舟を燃やす前の各段階において、道教閩山派の関係者による法事がある。	舟作り・舟出発前・舟を燃やす前の各段階において、僧侶によるお経を読む法事がある。(舟を燃やす前は統一で行うが、他は各寺院で行う)	主要段階において、宗教法事がある。中国「送王船」に関して、仏道習合・民間信仰化の現象が見られる。

注：「送王船」儀式の内容に関しては、筆者がフィールドワークを行った廈門と漳州地方に限る。「舟っこ流し」儀式の内容に関しては、主に『盛岡市無形文化財シリーズ 29 盛岡の裸祭 盛岡の舟っこ流し』（盛岡市教育委員会編）と「舟っこ流し」公式サイトなど文献調査の方法で得た情報になる。

以上、中国「送王船」と盛岡「舟っこ流し」は主なプロセスにおける共通点が多く、「舟っこ流し」は決して突発的な創造から生まれるものではないと主張することができる。

儀式の理念から考えると、儀式は文化の記念碑であり、人間のアイデンティティの本質を最もよく反映する行動様式であり、象徴的表現である。

(23) 石奕龍、「閩南人的王船祭与王爺信仰」、『閩台縁文文集刊』、25-34頁、2018年第2期。

すなわち、儀式は日記や議事録ではなく、またその支配的な言説は単なる物語や回想でもなく、むしろ想像の世界をシミュレートする実践であり、一連の象徴的行為を通じて「想像の世界」と「現実の世界」という二つの世界を結びつけるものであるのだ。「儀式において、現実の世界と想像の世界は、別々の一連の象徴形式によって一つの世界に融合される⁽²⁴⁾。」このような理由から、「送王船」は「人間と海洋の持続可能な結び付きの儀式と関連実践」として、ユネスコ無形文化遺産リストに登録された。

そして、「舟っこ流し」も同様である。舟作りが完成した後、地元の子供会が、五色蓮花の光を象徴する五色幣、千羽鶴、灯籠、造花などを飾り付け、一連の「映像の符号」が作り上げられる。供え物を用意し、提灯に火を灯し、さんさ踊りを踊って亡くなった家族の御霊を迎え、舟の前で入魂式を行うといった一連の行為の後、僧侶が法事を行い、「般若心経」と「阿弥陀経」を読誦して、「象徴行為の符号」を作り上げる。様々な「符号」が神秘的で厳粛な雰囲気醸し出し、人々に「あの世の家族とつながっている」と感じさせ、「符号が形成した場」を作り上げるのだ。そして、人々は焼香し、すなわち「あの世の先祖と子孫の間の距離を縮める」行為をした後、舟を担いで村の中を回り始める。夕暮れになると、各地の舟が明治橋の下の川辺に集まり、僧侶が再び法会を行った後、村人たちが舟を川の中央まで運び、松明で火を灯す。舟の周りに積まれている杉の葉が燃えている音と爆竹の音が魂を見送る賛歌となり、燃えた杉の葉の煙と龍頭に隠された花火が上がり、まるで現実の世界ではないかのように思わせる。厳かな雰囲気の中、人々は亡くなった家族が西の極楽浄土に辿り着けるよう祈る。

中国の「送王船」、江戸時代長崎の「彩舟流し」、現代九州地方の「精霊流し」、そして盛岡の「舟っこ流し」、いずれも舟を燃やすことで、故人の魂を西の極楽浄土に送るという儀式で、あの世の家族とのつながりを目的とする儀式である。儀式の実施に関して、フランス人類学者エミール・デュルケームは、このような言葉を残している。「儀式とは、何よりもまず、社会集団が定期的に自己を再統合するための手段である。それは血のつながりによるところもあるが、それ以上に、利益と伝統の共同体を形成して

(24) クリフォード・ギアーツ、『文化的解釈』（中国語版）、116頁、譯林出版社、1999年。

いるという事実によるところが大きい⁽²⁵⁾。」儀式を執り行う過程で、血のつながりや地域のアイデンティティ、あるいは「共同体意識」が高まるだけでなく、異なる地域のカテゴリーでさえも文化的アイデンティティへと向かい、その結果、共通の利害を持つ集団としての意識も高まるのである。盛岡の「舟っこ流し」は、この点で最も注目すべきものであり、男性中心という既成概念とは異なる多元的参加のカテゴリーを浮き彫りにしている。すなわち、一方では「舟っこ流し」は、僧侶が儀式を司り、一般市民が参加し、政府が支援するという強固なモデルを保持していることを認識しつつ、他方では、地域全体が参加する形式、すなわち、男性が舟を担ぎ、女性が祭りの使用品を載せたリヤカーを引き、子どもたちが五色幣を立てて、行列の進行を地域全体のみinnで守るという価値観も見出すことができる。こうしてこの「舟っこ流し」は、儀式のユニークな「社会的」コンセプトを反映するのである。

実際、中国の「送王船」にも、このような独特の形が見られる。行列の一番前に、箒隊の女性たちがほうきを持って王船のために道を開き、真ん中に男性たちが舟を担ぎ、そして最後に子供たちからなる百足陣が続く。この共通性は、「空間的なメッセージの伝達と普及であると同時に、時間から共同体の維持と共有された信念の表象⁽²⁶⁾」でもある儀式の社会的性質の反映でもあるのだろう。

3.2 現地社会に合わせて変容している

地理空間的な観点から見ると、文化は輸出地から周辺地域に広がっていくが、広がり方に関する一般的な情報通減の法則によれば、輸出地から離れれば離れるほど、文化の原形を維持することは不可能になる。ある文化的要素が他の地域に広がるとき、それはもはや元の形や意味ではなく、広がり、採用される過程で修正されるため、2つの場所の文化には類似点しがなく、まったく同じ文化はめったに見られない⁽²⁷⁾。文化の変容は、新しいものを生み出すだけでなく、マイナーなものよりも支配的なものを生み

(25) デュルケーム、『宗教生活的基本形式』（中国語版）、上海人民出版社、507頁、2000年。

(26) ジェームズ・ウィリアム・ケアリー、『作為文化的伝播』（『文化としてのコミュニケーション』の中国語版）、507頁、華夏出版社、2005年。

(27) 孟建煌・帅志强、『伝播学視野下的媽祖文化研究』、49頁、廈門大学出版社、2016年。

出す可能性もある。一言で言えば、新しく形成された文化は、伝統の重要な構成要素のひとつとなることもあれば、過去に取って代わって新たな文化伝統を構成する新たな主流となることもある。

中国の「送王船」と日本の「舟っこ流し」の最大の違いは、「送王船」の儀式に「代天巡狩（天に代わって世の中をパトロールする）の王爺」が登場し、「鬼」から「神」への決定的な変身を遂げたことである⁽²⁸⁾。台湾人文化人類学者劉枝萬の歴史学検証によれば、「王爺」の身分及び機能は、当初の「怖い餓鬼」から、「疫病神」・「海の神」・「医療の神」・「地域の神」へと五段階変化し、最後には「万能の神」となった⁽²⁹⁾。「王爺」の登場とその機能の拡大は、時代ごとの人々のニーズの拡大を反映している。すなわち、文化の伝播に関係なくとも、文化現象そのものは常に変化しているのである。文化を広める過程で、発信する情報の量を一定に保つことは難しく、現地の外部環境、気候、人文などの違いから、進化を余儀なくされるのは必然である。このような進化は、物事の発展の基本法則に沿ったものであるばかりでなく、物事が継続的に生成されるために必要なことでもある。本稿で取り上げた舟送りの風習は、参加者及び見物客の共感度がそれぞれ異なる。以下の表2から個々の舟送りの風習で関与する層に関して、分析してみた。文化変容の次元から見れば、参加者・見物客の共感度（気持ち上の自らの参加度）が高ければ高いほど祭りの伝承がしやすくなると考えられる。

表2：個々の舟送りの風習からみる関係者の立場の違い（筆者作成）

	「彩舟流し」	「舟っこ流し」	「送王船」
送る対象	唐船移動中水死した船員・異国の地で死亡した長崎華僑	初期：戦争災害の死者；現代：亡くなった親族の魂がメインで、偶に大規模な災害で亡くなった人	初期：船移動中水死した船員；現代：疫病を操る力がある「王爺」

(28) 三尾裕子、『「鬼」から「神」へ——台湾漢人の王爺信仰について』、『民族学研究』第55期、243-368頁、1990年。

(29) 劉枝萬、『台湾之瘟神信仰』、聯経出版社、7頁、1983年。

儀式の目的 (性質)	非業の死を遂げた人の魂から人間界への害を避けるため、地獄に落ちる魂を慰めるため (抑制目的の鎮魂)	亡くなった家族を西の極楽浄土に送るため (慰霊→成仏)	初期：非業の死を遂げた人の魂から人間界への害を避けるため；現代：疫病退治、五穀豊穡、除災招福 (抑制目的の鎮魂→平安祈願)
実施機関	長崎の唐寺	初期：盛岡市の黄檗宗寺院； 現代：盛岡市寺院の寺檀共同体 (小規模)	初期：閩南地方の一部の寺院の寺檀共同体 (小規模)； 現代：地域共同体 (大規模)
参加者から見た送られる側の存在 (参加者の心境)	血縁関係のない他者 (同情心で見ただけ)	血縁関係のない他者→血縁関係のない他者+自分の家族 (家族愛がメイン)	血縁関係のない他者+自分の家族→地域全体 (除災招福の願い)
参加者の共感	低い	やや高い	高い

以上、日中間いつくかの舟を送る祭祀を分析してみた。それぞれの歴史的展開において、施餓鬼 (普度) の宗教的な役割のもとで、儀式の目的、儀礼の実施主体、参加者の立場などの変容、そして何よりも「他者」へのまなざしから「自己」へのまなざしの変容が見られる。「鬼」から「神」への身分の変化、さらに参加者の共感度が高まることで、個々の家庭から地域全体、地域外からも観光客が来訪する一大民間信仰まで進化している。この点、文化伝播時の外部環境の変化は、祭祀の外的変化をもたらすだけでなく、文化伝播のルーツを反映し、ひいては文化伝播の段階的な変容を反映しているのかもしれない。マレーシアの華人コミュニティでは、亡くなった親族や非業の死を遂げた人の魂を慰めるために、毎年の中元時期に「発船」を燃やすが、これも中国文化が他国に渡った後の「受容」のさまざまな段階を反映している。日本では、「舟っこ流し」は中国の「送王船」の基本的な儀式内容、祭祀の初期の目的をそのまま残しており、海外における中国の「送王船」文化の生きた化石とみなすことができる。

しかし、「舟っこ流し」も昔のままではないことに注意すべきである。男性参加者は、日本ならではの鉢巻や、「裸参り」が盛んな東北地方でよく見られるふんどし姿で、日本の地域性を際立たせている。また、先祖の御霊を迎える際に、この地域ならではの「さんざ踊り」が踊られている。「舟っこ流し」は、日本独自の強い生命力を維持し、外部環境にも対応しながら進化しつつ、そして脈々と継承されてきた。また少子高齢化の深刻化とともに、主力になる若者の減少に対応するため、子供会の子どもたちにも活動への参加を呼びかけている。例えば、舟づくりの段階において、後継者育成のために一隻の小舟を作ってもらい、千羽鶴の製作、五色弊の製作、また短冊に願い事書いてもらうなど各段階で参加をしてもらう。これに加えて、地域によっては女性が舟を担ぐという新しい動きまで見られる。このように、「舟っこ流し」は「他者融合」と「適者生存」の原理の働きのもとで、代々受け継がれていく。

終わりに

文化の伝播、アカルチュレーション (acculturation) には「媒体」が不可欠である。二つの異なる文化集団が継続的かつ直接的に「接触」した後、一定の条件のもとで、それぞれの文化に内在する要素を活性化させ、高揚させ、最終的に両サイドの文化が共に変化していく。すなわち、中国の「送王船」の海外伝播は、福建出身の華僑の海外移住がなければ当然成り立たなかったのである。他方では、仏教黄檗宗の力や普度文化の影響も無視できない。移民移神（信仰）の一体化現象は華僑社会ではよく見られる。日本では、江戸時代に黄檗宗が政権の上層部の支持を得ながら、一気に日本の隅々まで普及した。これは極めて効率的で強力な文化伝播の媒体であり、黄檗宗が民衆の心に浸透するための体系的な保証を与えただけでなく、後世の学者が伝播媒体を検証する際にも、より信憑性の高い材料を提供したのである。

また、江戸時代、長崎の「彩舟流し」と盛岡の「舟っこ流し」の継承関係を検証するには、非常に重要な意義がある。現代長崎の「精霊流し」の由来に関して、さまざまな説が彷徨うなか、「彩舟流し」のルーツを探る

ことで、逆方向からの推理となり一歩前進したと考える。

フィールドワークを行った福建省の各寺院、特に「水美宮」、「保泉宮」の関係者、また質問に回答していただいた「盛岡舟っこ流し協賛会」の鈴木一夫氏に感謝の意を申し上げたい。今後は実際に日本国内で現地調査を行い、「送王船」研究シリーズをより充実した内容にしたいと考えている。